

芦屋大学論叢 第86号
(令和8年7月31日)抜刷

《研究ノート》

特別活動の視点から児童の意識を手がかりに
学級の人間関係とその現在地を捉える

ー全体交流における直接対話と ICT 共有の選択理由の分析ー

塩 家 崇 生

《研究ノート》

特別活動の視点から児童の意識を手がかりに 学級の人間関係とその現在地を捉える

－全体交流における直接対話と ICT 共有の選択理由の分析－

塩 家 崇 生

芦屋大学臨床教育学部非常勤講師

(帝塚山大学教育学部)

1. はじめに

近年、次期学習指導要領の改訂に向けた議論¹⁾では「主体的・対話的で深い学び」や「多様性の包摂」など児童が多様な他者と関わりながら学ぶことを重視する方向性が示されている。これらは、児童が安心して意見を述べ、仲間と協働しながらよりよい集団を形成する経験を重視する特別活動の理念と深く関わっている。特別活動は、「集団や社会の形成者としての見方・考え方」を働かせながら「様々な集団活動に自主的・実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決する」ことを通して、資質・能力を育むことを目指す教育活動であるということが学習指導要領²⁾に示されている。

こうした背景のもと、学級の中で児童がどのように他者と関わり、どのような意識で話し合いに参加しているのかを丁寧に捉えることの重要性が高まっている。特に、児童が安心して参加できる環境を整えるためには量的データだけでは捉えきれない学級の人間関係とその現在地を、児童自身の言葉や交流方法の選択の背景から把握する視点が不可欠である。

学級活動に関する先行研究として水流ら (2025)³⁾は、クラス会議の理論と手法を取り入れた話し合い活動を継続的に実施し、児童の自己有用感が向上したことを明らかにしている。自由記述の分析からは、互いに認め合う経験を通して他者の良さや努力を承認しようとする意識が高まり、承認される喜びや役に立てたという感情がさらに貢献したいという思いにつながる可能性が示されている。この研究は、話し合い活動の継続が児童の心理的側面に与える「結果」を明らかにした点で意義深い。

一方で、学級活動全体の中で児童が主体的に関わり、学級の課題を自ら見だし改善していく過程に焦点を当てた実践も存在する。塩家 (2022)⁴⁾は、同年度に担任した学級において児童が年間を通して主体的に学級づくりに関わることを目的とした一連の学級活動（以下、参画プロジェクト）を実施した。参画プロジェクトでは、学級目標の設定、会社活動、行事企画、異学年交流などを児童が主体となって進めることを重視し、学級の課題を自ら見だし、改善に向けて協働する経験を積み重ねてきた（図1～5）。さらに、学級の状態を把握するために、協力・対話・自律・安心などの側面を測定する学級力アンケート⁵⁾を年間6回実施し、その結果を基に学級会で振り返りを行う取り組みを継続した（図6）。これらの実践は、特別活動の三つの視点（人間関係形成・社会参画・自己実現）に基づく学級文化の形成に寄与していたと考えられる。

ただし、これら二つの研究はいずれも単学級を対象としており、学級間の比較を通して学級の状態を相対的に捉える視点は十分に検討されていないという課題があった。学級の状態をより精緻に理解するためには、複数学級を対象とした比較的な検討が不可欠である。こうした観点から本研究では、塩家 (2023)⁶⁾が小学

6 学年 2 学級を対象に実施していた道徳科授業における対話方法＜直接対話 / ICT 対話＞の選択とその理由（自由記述）のデータ、および学級力アンケートの結果は学級間の違いを相対的に捉えるための有効な素材となり得る。これらのデータを再分析することで、児童がどのような交流方法を選択し、その背景にどのような意識があるのかを手がかりに、学級の人間関係とその現在地を読み取る可能性が開かれる。



図 1 下級生を楽しませる企画プロジェクト



図 2 体育大会にむけての教室掲示プロジェクト



図 3 体育大会前日黒板アートプロジェクト



図 4 クラスの笑顔プロジェクト



図 5 学級劇プロジェクト



図 6 学級力アンケート結果を活かした学級会

※他にもたくさんのプロジェクトが企画されていたが、紙幅の関係で一部のみの紹介とする。

2. 研究の目的と方法

2-1 研究の目的

本研究の目的は、2021 年度に実施した道徳科授業における意見交流に関する意識調査データを再分析し、小学 6 学年 A・B の 2 学級において、児童が全体交流の場面でどのような対話方法（直接対話／ICT 共有）を選択し、その理由としてどのような意識を示しているのかを明らかにすることである。また、両学級の学級力アンケートの結果と照合しながら、交流方法の選択に表れる児童の意識を特別活動の視点から検討し、学級の現在地を相対的に捉える手がかりを得ることを目的とする。

なお、本研究では交流方法の選択を ICT 活用の是非として扱うのではなく、児童が安心して他者と関わろうとする際の行動として捉え、学級づくりの理解に資する視点を得ることを意図している。

2-2 研究の対象

本研究は、塩家（2022, 2023）が 2021 年度に実施した意識調査データを対象とする。調査は兵庫県伊丹市立鴻池小学校第 6 学年の 2 学級で行われ、当該年度は同校において一人一台端末が本格的に導入された初年度であった。

A クラス（31 名）：筆者が担任を務め、年間を通して自主的な学級活動（特別活動）を継続していた学級である。協力・対話・自律・安心などの側面を測定する学級力アンケートも継続的に実施していた。

B クラス（29 名）：端末活用に関する授業研究の対象学級であり、筆者は週 3 回の社会科授業を担当している。学級力アンケートは同時期に A クラスと同様、実施されている。

表 1 対象学級の授業実施日と交流方法

		A	B
教材ア	実施日	10月18日	10月19日
	端末	非活用	活用
教材イ	実施日	10月19日	10月20日
	端末	活用	非活用

なお、両学級とも筆者が授業者として道徳科における端末活用授業と非活用授業を実施しており（表 1）、その後に意識調査が実施された。その結果、交流方法の選択に関しては A クラスと B クラスで対照的な傾向が見られたため、本研究ではこの違いを両学級の特徴を捉える比較材料として扱う。

なお、本研究で扱う調査およびデータの利用については、当時の学校長の承認を得て実施したものである。

2-3 研究の方法

本研究は、既存データを用いた再分析研究である。A クラスを主たる分析対象としつつ、B クラスのデータを比較材料として参照し、端末活用に対する意識や年間を通じた自主的な学級活動が児童の人間関係づくりにどのように影響しているかを検討する。分析は以下の手順で行う。

（1）交流方法の選択と「友達の考えの知り方」に関する意識データの整理

道徳科の全体交流において、児童が「直接対話」「ICT 共有」のいずれを選択したかを集計する。また、同じ調査内で実施された「友達の考えをどのように知りたいか」に関する 5 つの選択肢「一人ずつの発言で知りたい」「どちらかといえば発言で知りたい」「どちらともいえない」「どちらかといえば端末で一気に見たい」「端末画面で一気に見たい」の回答分布を整理し、児童が望む交流のあり方を数量的に把握する。

これらは同一調査で得られたデータであり A・B 両学級における交流観や端末活用に対する意識を把握するための基礎資料とする。両学級の回答傾向には対照的な特徴が見られたため、その差異を比較することで学級間の特徴を相対的に捉えることが可能となる。

なお、本分析では、交流方法の選択が「関係性を重視する姿勢」か、または「効率を重視する姿勢」かどうかを読み取り、選択に表れる価値観の違いを明らかにする。

(2) 自由記述の質的分析

(1) で扱った交流方法の選択理由に関する自由記述については、教育実践研究で広く用いられている質的分析の手続き（コード化 → カテゴリー化）を採用した。まず全記述を精読し、児童が交流方法を選択した理由に関する語句を抽出して初期コードを付与する。次に意味内容の類似性に基づいてコードを統合し、カテゴリーとして整理する。

カテゴリー化にあたっては A・B クラス双方の記述を比較し、「人間関係志向（他者理解・関係性）」「心理的安全性」「作業志向（効率・負担軽減）」「情報量・見通し」「状況依存・中間的立場」といった観点に整理する。その上で、両クラスの記述における共通点や相違点に注目し、他資料で明らかになった結果と照合しながら、両学級の現在地を考察していく。

(3) 学級力アンケートの整理

対象学級では、年間を通して学級力アンケートを継続的に実施している。本研究では、特別活動ワーキンググループ（以下 WG）資料⁷⁾で示されている「学級経営の核」と照らし合わせながら位置づけた。

同資料では学級経営が目指すものとして

(A) 学びに向かう学習コミュニティの形成

(B) 心理的安全性の確保

(C) 民主的な社会の形成者として必要な資質・能力の育成

の三側面が重視されている。

本研究では、この三側面を学級力アンケートの 6 領域と対応づけるため、各項目の意味内容を参照しながら以下のように理論的に再整理した。なお、この分類はアンケート作成者や文部科学省が公式に示したのではなく、WG 資料の理念と本研究の分析目的に基づき、筆者が独自に構成した分析枠組みである。

(A)：学びに向かう学習コミュニティの形成

…①目標をやりとげる力、②自律する力

(B)：心理的安全性の確保

…③友達を支える力、④話をつなげる力

(C)：民主的資質の育成

…⑤安心を生む力、⑥きまりを守る力

この枠組みに基づき、道徳科授業実施直後の学級アンケート結果（表 2）を、両学級の現在地を把握するための背景資料として参照する。ただし、これらの数値は児童が自分の学級をどのように捉えているかという主観的評価であり、数値の高低をそのまま学級の実態と結びつけることには慎重

さを要する。低い数値は「謙遜」や「自己評価の厳しさ」を反映している可能性がある一方で、高い数値はその反対にあたる実態以上に肯定的に捉えてしまう傾向や、ときに「驕り」ともいえる自己認識の甘さを反映している可能性がある。

表 2 10 月に実施した学級力アンケート結果

学級経営の核		領域	項目	A	B
(A)	学びに向かう学習 コミュニティの 形成	目標を やりとげる力	設定	94	71
			もはん	88	63
		自律する力	反省 運営	88 91	63 70
(B)	心理的安全性の 確保	友だちを 支える力	支え合い	91	81
			素直	90	79
		話を つなげる力	新しさ 合意	97 92	67 69
(C)	民主的な社会の 形成者として 必要な資質・能力 の育成	安心を生む力	平等	90	87
			尊重	79	72
		きまりを守る力	学習 時間	65 82	62 71

したがって、アンケート結果は学級の状態を直接示すものではなく、児童の自己認識の傾向を把握するための一資料として位置づける。

なお、本論文ではこのアンケート結果を学級の背景情報として提示し、4章において交流方法の選択理由（自由記述）と照らし合わせることで、数値だけでは捉えきれない学級の現在地を多面的に考察するための補助データとして用いる。

3. 結果

本章では、A・B両クラスを対象として収集された既存データを整理し、児童の交流方法の選択や学習の受け止め方、さらに交流方法を選択した理由に関する記述の特徴を明らかにする。扱うデータは、前章で示した3つの資料（①交流方法の選択と「友達の考えの知り方」に関する意識データ、②自由記述の質的分析、③学級力アンケート結果）に対応して提示する。

まず、交流方法の選択と「友達の考えの知り方」に関する意識データを整理し、児童がどのような交流のあり方を望んでいたのかを数量的に示す。続いて、交流方法を選択した理由に関する自由記述を質的に分析し、抽出されたカテゴリーを通して、児童が交流方法を選択する際に重視していた観点を明らかにする。さらに、10月に実施した両クラスの学級力アンケートの結果を照合し、学級の背景的特徴を把握する。

これら3つのデータの整理を通して、両クラスの児童が交流場面でどのような価値観を示していたのかを多面的に捉え、第4章での考察につながる基礎的な知見を得る。

3-1 交流方法の選択（表3）

まず、全体交流における交流方法の選択についてAクラスの児童が「直接対話（発言）」と「ICT共有（端末）」のいずれを選んだかを集計した。その結果、Aクラスでは48.4%が直接対話を選択し、35.5%がICT共有を選択した。一方、比較対象として参照したBクラスでは、Aクラスとは異なる傾向が見られ、ICT共有を選択する児童が多かった（64.3%）。この違いは、Aクラスの交流観を理解する際の参考となる。

表3 全体交流における交流方法の意識

交流方法	学級（%）	
	A	B
直接対話	48.4	17.8
ICT共有	35.5	64.3

3-2 「友達の考えの知り方」に関する結果（表4）

「友達の考えをどのように知りたいか」に関する5つの選択肢の回答分布を整理したところ、Aクラスでは「一人ずつの発言で知りたい」が25.8%、「どちらかといえば発言で知りたい」が22.6%であり、発言による把握を望む児童が全体の約半数を占めた。「どちらともいえない」は16.1%であった。一方で、「どちらかといえば端末で一気に見たい」は6.5%、「端末画面で一気に見たい」は29.0%であり、端末による把握を望む児童も一定数存在した。

表4 「友達の考えの知り方」に関する結果

選択項目（択一式）		学級（%）	
		A	B
ア	一人ずつの発言で考えを知りたい	25.8	7.1
イ	どちらかといえば発言で知りたい	22.6	10.7
ウ	どちらともいえない	16.1	17.9
エ	どちらかといえば一気に見たい	6.5	10.7
オ	端末画面で一気に見たい	29.0	53.6

Bクラスでは、「端末画面で一気に見たい」が53.6%と最も高く、「どちらかといえば端末で一気に見たい」が10.7%であった。発言による把握を望む児童は「一人ずつの発言で知りたい」が7.1%、「どちらかといえば発言で知りたい」が10.7%であり、Aクラスと比較すると、端末による把握を望む傾向がより強く表れていた。「どちらともいえない」は17.9%であった。

以上の結果から、Aクラスでは発言による把握を望む児童が比較的多い一方で、端末による把握を選ぶ児童も一定数存在し、交流のあり方に対する志向が多様であることが確認された。Bクラスは端末による把握を望む児童が多数を占め、Aクラスとは対照的な分布を示した。これらの傾向は、次節で扱う自由記述の内容とあわせて検討することで、両クラスの交流観の特徴をより立体的に捉える手がかりとなる。

3-3 自由記述の質的分析に関する結果（表5・6・7）

本研究では、児童の自由記述を質的に整理するため、5つのカテゴリー（ア：人間関係志向、イ：心理的安全性、ウ：作業志向、エ：情報量・見通し、オ：状況依存・中間的立場）を基準として分類した。各カテゴリーには判断のためのキーワードと典型例を設定し、児童の記述内容がどの観点に該当するかを整理した（表5）。

表5 自由記述の質的分析における5つのカテゴリー

	カテゴリーとキーワード	典型例と記述内容における解説
ア	人間関係志向 （他者理解・関係性） キーワード： 気持ち・声・表情・その場・話したい・伝わる	典型例「声の感じで気持ちがわかるから発表がいい」 「表情を見ながら話したほうが本気度が伝わる」 「その場で話すと友達がどう思っているかがよくわかる」 「話しているときの雰囲気ので考えが深まる」 → 発言という[人と人の関係性]を重視している記述。
イ	心理的安全性 キーワード： 恥ずかしい・緊張する・見られたくない・安心	典型例「みんなの前で話すのは恥ずかしいから画面がいい」「発表は緊張するので端末のほうが安心する」 「間違えたらいやだから画面で見たい」 → 発言・端末のどちらを選ぶかの理由が[安心感]に関係している記述。
ウ	作業志向 （効率・負担軽減） キーワード： 早い・楽・一気に・読むだけ・効率	典型例「一気に見られるから画面がいい」 「読むだけでわかるから楽」「早く終わるから端末がいい」 「まとめて見たほうが効率がいい」 → [効率性や手軽さ]を理由にしている記述。
エ	情報量・見通し キーワード： 見やすい・整理されている・わかりやすい・一覧	典型例「画面のほうが整理されていて見やすい」 「一覧で見られるから考えが比べやすい」 「発表だと忘れるけど、画面なら残るからわかりやすい」 → [情報の扱いやすさ・見通しの良さ]を理由にしている記述。
オ	状況依存・中間的立場 キーワード： どちらでも・気分・場合による・どっちも	典型例「どちらでもいい」「その日の気分で決める」 「どっちもいいところがある」「内容によって変わる」 → 発言／端末のどちらにも強く寄らず、[状況によって選ぶ]という立場。

この基準に基づき A クラスの自由記述を分類した結果、人間関係志向が 13 件、心理的安全性が 0 件、作業志向が 8 件、情報量・見通しが 5 件、状況依存・中間的立場が 3 件であった（表 6）。同様に B クラスの自由記述を分類した結果、人間関係志向が 0 件、心理的安全性が 4 件、作業志向が 9 件、情報量・見通しが 9 件、状況依存・中間的立場が 3 件であった（表 7）。

表 6 A クラスの 5 カテゴリー別整理結果

	選択肢	人間関係志向	心理的安全性	作業志向	情報量・見通し	状況依存・中間的立場
A	5 発表順	6	0	0	2	0
	4 どちらかといえば発表順	4	0	1	2	0
	3 どちらともいえない	0	0	0	0	3
	2 どちらかといえば端末で一気に見る	1	0	0	1	0
	1 端末で一気に見る	2	0	7	0	0
合計		13	0	8	5	3

表 7 B クラスの 5 カテゴリー別整理結果

	選択肢	人間関係志向	心理的安全性	作業志向	情報量・見通し	状況依存・中間的立場
B	5 発表順	0	0	0	1	0
	4 どちらかといえば発表順	0	0	1	2	0
	3 どちらともいえない	0	0	1	0	3
	2 どちらかといえば端末で一気に見る	0	0	2	1	0
	1 端末で一気に見る	0	4	5	5	0
合計		0	4	9	9	3

4. 考察

4-1 両学級に共通して見られた特徴

A・B 両クラスの自由記述を比較すると、交流方法の選択傾向には違いが見られたものの、両学級に共通して「情報量・見通し」に関する記述が一定数確認された。

端末交流を選択した児童からは「全員の考えが一度に見える」「画面を見ればいつでも確認できる」といった記述が見られ、発言交流を選択した児童からは「一人ずつ理由を丁寧に聞ける」「発表順の方が、自分の考えを整理しながら聞ける」といった記述が確認された。これらの記述から、児童はいずれの学級でも、自分にとって内容を把握しやすいと感じる方法を選択していた。

また、学級力アンケートの結果では、「安心を生む力（平等・尊重）」の数値が A・B 両クラスで近い値を示しており、互いを尊重しながら関わる基盤が両学級に共通して存在していた。

4-2 両学級に見られた相違点

A・B 両クラスの比較から、交流方法の選択理由や自由記述の内容には明確な違いが見られた。

まず、全体交流における交流方法の選択では、A クラスの 48.4% が発言による直接対話を支持していたのに対し、B クラスでは 64.3% が ICT を用いた共有を支持していた。

自由記述のカテゴリー分布では、A クラスで最も多かったのは人間関係志向（13 件）であり、「発表している人の声で気持ちがわかる」「一つ一つの考えを聞いていく方が面白い」「みんなと話し合いながら進めていく方が楽しい」など、対話の雰囲気や友達の気持ちを重視する記述が多く見られた。また、「次はどのような考えが出てくるかドキドキする」「詳しく聞き直すことができる」「友達の考えを一つ一つ理解して結び付けて考えられる」といった記述も確認された。

一方、B クラスでは作業志向（9 件）と情報量・見通し（9 件）が多く、「一気に見られる」「手間が省ける」「授業が早く進む」といった効率性に関する記述が見られた。また、「見やすい」「いつでも確認できる」「いろいろな考え方を学べる」といった、全体把握や情報整理のしやすさに関する記述も確認された。さらに、心理的安全性に関する記述は A クラスでは 0 件であったのに対し、B クラスでは 4 件存在した。「発表だと緊張してしまう」「発表の苦手な子の意見も見られる」「共同閲覧の方が発表する人が増える」といった記述が確認された。

学級力アンケートの結果では、「目標をやりとげる力」「自律する力」「友達を支える力」「話をつなげる力」において A・B 間に大きな差が見られた。

4-3 総合考察

A・B 両クラスの自由記述、交流方法の選択傾向、学級力アンケートの結果を総合すると、両学級の児童がもつ交流の在り方には共通点と相違点があり、それらは学級の現在地を示す重要な手がかりとなる。

まず、共通点として両学級の児童はいずれも「情報量・見通し」を交流方法の選択理由として挙げていた。端末交流では「全員の考えが一度に見える」、発言交流では「一人ずつ理由を丁寧に聞ける」といった記述が見られ、児童はいずれの学級でも、友達の考えを把握し、内容を整理しながら理解したいという意識をもって交流方法を選んでいった。また、学級力アンケートにおける「安心を生む力（平等・尊重）」の数値が近いことから、両学級には互いを尊重しながら関わる土台が一定程度整っているといえる。

一方、相違点に目を向けると両学級の現在地は大きく異なる。A クラスでは、人間関係志向の記述が多く、対話の雰囲気や友達の気持ち、声のニュアンスを受け取りながら学びを深めようとする姿が見られた。「次はどのような考えが出てくるかドキドキする」といった記述に示されるように、リアルタイムのやりとりそのものを楽しむ姿勢も特徴的である。こうした姿は、対話を中心に活動を組み立てる文化が学級内に形成されていることを示している。

さらに、学級力アンケートでは「話をつなげる力」「友達を支える力」が比較的高い値を示しており、児童が互いの意見を受け取りながら関係性を深める姿勢が数値としても裏づけられている。文部科学省特別活動 WG⁸⁾ の論点整理が示す「学級内の多様性を前提に、共生社会の実現に向けた納得解を形成することの重要性」という方向性に照らすと、A クラスでは、こうした理念が日常的な交流の中で自然に機能している現在地が確認できる。

これに対して、B クラスでは作業志向や情報量・見通しを重視する ICT 共有に関する記述が多く、「一気に見られる」「手間が省ける」といった効率性を求める姿が目立った。また、心理的安全性に関する記述が 4 件見られたことから、発言に対する不安や緊張が一定程度存在し、ICT 共有が「安心して参加できる方法」として選択されている現在地が読み取れる。

学級力アンケートでは「目標をやりとげる力」「自律する力」「友達を支える力」「話をつなげる力」が A クラスより低い傾向にあり、これは自由記述に見られた効率性の重視や発言への不安と整合できる。特別活動 WG が提言する「子供が主体的・実践的に取り組む活動」という特別活動の特質を踏まえると、B クラスは児童が安心して学級での活動に参加するための土台づくりが求められる段階にあるといえる。

以上のことから、A クラスでは、対話を通して互いの考えを受け取り、多様な意見を基に学びを深めようとする学級の風土が現在地として確認された。一方で、B クラスでは、効率性や見通しの良さを重視し、発言への不安から ICT を介した共有が選択されやすいという学級の風土が現在地として読み取れた。特別活動 WG が提言する「子供が主体的・実践的に取り組む活動」という特質を踏まえると、児童が安心して

学級の活動に参加できるための土台づくりが求められる段階にあるといえる。

以上のことから、児童の意識を丁寧に読み取ることは、学級の現在地をつかむための一つの手がかりになり得ることが示唆された。

5. おわりに

本研究では、交流方法の選択理由に表れた児童の意識を手がかりに、AクラスとBクラスにおける人間関係とその現在地を読み取ることを試みた。その結果、児童が交流に向かう際の捉え方には学級ごとの傾向があり、それらは学級に形成されつつある風土として把握できる可能性が示された。また、児童の意識を丁寧に読み取ることは、学級力アンケートの結果と補完し合いながら、学級の今の姿を多面的に捉える視点となり得ることが示唆された。一方で、本研究にはいくつかの課題が残されている。対象が2学級に限られているため、得られた知見を一般化することはできていない。また、学級の風土がどのように変化していくのかを縦断的に追うことはできておらず、今後は時間的経過を踏まえた検討が必要である。さらに、児童の記述の深さには個人差があり、意識の読み取りには限界がある。ICT活用が児童の選択理由に与える影響についても、より精緻な分析が求められる。

今後は、他学年・他校での調査や多様なデータを用いた検討を通して、児童の意識を手がかりに学級の現在地を捉える方法の妥当性をさらに探っていくことが期待される。本研究は、これまでの実践で得たデータを基にした一つの試みにすぎないが、こうした視点が今後の学級づくりや研究の中で、さまざまな形で発展していくことを願いたい。

謝辞

本研究の実施にあたり、伊丹市立鴻池小学校の皆様には多大なるご協力をいただきました。当時の宮谷和教校長先生をはじめ、学年担任の横山和伸先生には、日程調整やアンケート調査における集計など、多方面にわたりご尽力いただきました。また、学級力アンケートについては横山先生からご提案いただいたものであり、本研究の検討を深めるうえで大きな助けとなりました。

さらに、日々の学級活動の中で、自分の考えや思いを丁寧に記述し、調査に真摯に向き合ってくれた児童の皆さんにも深く感謝いたします。皆さんの言葉が、本研究の基盤となりました。

ここに記して、心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 文部科学省 (2025) 「論点整理 (素案)」, 中央教育審議会教育課程企画特別部会,
https://www.mext.go.jp/content/20250904-mxt-kyoiku-000043994_03.pdf (2026 年 4 月 29 日閲覧).
- 2) 文部科学省 (2017) 『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説特別活動編』, p.7.
- 3) 水流卓哉ら (2025) 「クラス会議の理論と手法を取り入れた話し合い活動が 児童の自己有用感に及ぼす影響」,
『日本特別活動学会紀要』 33 号, 日本特別活動学会, pp.99-107.
- 4) 塩家崇生 (2022) 「児童による積極的な学級づくりへの参画プロジェクトの実践～「やってみる」と言える児童集団の育成に向けて～」, 令和 3 年度日本特別活動学会第 8 回実践事例募集事業推奨実践事例, 事例 2.
- 5) 今宮信吾・田中博之 (2021) 『NEW 学級力向上プロジェクト』, 金子書房.
- 6) 塩家崇生 (2023) 「「タブレット端末」と「道徳ノート」を活用するブレンド型授業に向けてーデジタルとアナログの特性を生かした授業デザインの構築ー」, 『未来教育研究所紀要』 第 11 集 研究助成採択研究 最終報告書, p.69-70.
- 7) 文部科学省 (2026) 「学級活動について (学級経営, 生徒指導, 特別支援教育等)」, 教育課程部会特別活動ワーキング資料 1,
https://www.mext.go.jp/content/20260323-mxt_kyoiku_01-000048442_3.pdf (2026 年 4 月 29 日閲覧).
- 8) 文部科学省 (2026) 同上, p.4.

Abstract

Using children's perspectives in extracurricular activities as a guide to understand classroom relationships and their current state
 -Analysis of the Reasons for Choosing Direct Dialogue and ICT Sharing in Group Interaction-

Takao SHIOYA

This study focuses on the reasons children gave for choosing “direct dialogue” and “ICT sharing” during whole-class interaction in moral education lessons, with the aim of gaining a relative understanding of the current state of the classroom based on their underlying perceptions. We reanalyzed data from a 2021 survey of student attitudes and a class cohesion questionnaire administered to both 6th Grade Class A and Class B, organizing the open-ended responses into five categories: (1) relationship orientation, (2) psychological safety, (3) task orientation, (4) information volume and predictability, and (5) situational dependence and intermediate stance. The results showed that Class A exhibited a strong “relationship orientation,” prioritizing the atmosphere of dialogue and friends' feelings, while Class B showed a stronger tendency toward “efficiency” and “sense of security.” These differences corresponded to the three aspects of extracurricular activities, demonstrating that the students' reasons for choice serve as effective clues for interpreting the class culture and state.